

阪神・淡路大震災と文学・文学者（一）

——小田実・田中康夫・金時鐘などの表現行為について——

吉 田 永 宏

はじめに

一九九五（平成七）年一月十七日午前五時四十六分、神戸市を中心とする関西圏の広範囲の地域を大地震が襲った。〈阪神・淡路大震災〉と呼ばれる大地震である。作家・小田実が〈誰が名づけたか知らないが、今、世に「阪神大震災」と呼ばれる大地震^①〉と書き、作家・田中康夫が〈関西大震災^②〉と呼ぶ地震とそれに伴う災害は、世に言う「天災は忘れた頃にやってくる」の格言にある「天災」と認識するには余りにも大きな意味を持つものであった。例えば田中康夫「ゲンチャリにまたがって」^③には、〈大震災直後の調査によると負傷者は3万4568人、避難者は32万298人、避難所は1万247カ所だった。全壊家屋は8万2105棟、一部損壊は9万8892棟。火災発生件数は531件で、兵庫県の推定によると100ヘクタールが消失した。鉄橋・高架の落下は21カ所、脱線15本、トンネル破損5カ所、駅舎・施設損壊は40カ所。24港で港湾損壊となった。電気は100万戸、ガス85万7400戸、水道121万9000戸、電話47万3500回線が不通となった。〉と記載されているが、この地震はこれだけ

の大きな数字の災害を齎したのみではなく、様ざまな社会的矛盾を人びとの前に露呈した。社会的強者はその被害が小さく、社会的弱者と見られる劣った生活環境条件にある者に対しては情け容赦なくその兇悪な牙を剥いて襲いかかった。機構としての社会的矛盾が露呈したのみでなく、存在としての人間そのものがまる裸にされた観すらある。単に天災として済ませてはなるまいと考える所以である。

在日朝鮮人である詩人・金時鐘は長年月を兵庫県立湊川高校（夜間高校）の教師として神戸の地で過ごした経験の上に立って、この震災についての思いを、直後に「苦難と人情と在日同胞」と題して記している。⁴少し長くなるが次に引いておく。（ルビ・ママ）

（前略） 気もふさぐばかりの日がようやく一カ月近く過ぎた今、私たちはいやおうもなく経済的欲求に浮かれ、ふくらんだ都市の、くろぐろしい残骸を眼の前にしている。いつまた目見え^{まみ}るともない大自然の、それは重々しい無言の啓示だ。もちろんこのたびの災害は天変地異がもたらしたものである。私たちがこの地球で生きているのと同じく、地球もまた生きていればこそ、私たちをそこで生かしてもくれる。つつましく折り合^あって生きねばならないのは私たち、人間の方だが、いつの間にかその地球への畏敬を忘れ、利便を先だてて削^うり穿ち、風が憩^{やす}う場所すら詰めて海まで退かせた。

言語を絶する大災害のなかで、それでも人々は這うように手さぐりで扶^{たす}け合い、交わりのない者どうしが支え合^あって耐えた。ひきもきらないボランティアたちの熱意といい、久しく見ない人間讃歌をそこに見た。

だがこの感銘は人間信頼への手がかりであつても結実ではない。被災者への対応、救済をめぐる^らは、すぐにも損得の感情がむきだしになつてこよう。一杯の水の貴重さを知ったなら、その貴重さを見すごしてきた自

分を見つめなおすことで、お互いの信は問われねばならない。

或る公立高校の学校長が、パニックに陥らなかった被災地の人びとの沈着さを褒めて、そこから日本人の資質の優秀さを誇った由で、その言説を取り上げて、その自負には自己を見つめる批評がないと指摘した上で金時鐘は、
〈炎魔がもつとも猛りくるった神戸市長田区には、いわれているだけでも百四十余人の犠牲者をだした在日同胞の密集地がある。被災地に騒動がなかったとすれば、その人たち、つまり在日同胞も含めてしずかだったのだ。〉と感慨を記して、更に筆を進めている。「神戸」はいわば在日する己の知命の地でもあった所だというのが、金時鐘の大前提なのである。

実際は沈着どころか、声も出ないほどの呆然自失に見舞われていたのがその実相であろう。放心状態の人々を沈着などと言いかえてはならない。そればかりか実利優先の日本の社会にあって、実質的にその予備軍を育てているといえなくもない中等教育担当者の、現今の教育に対するかげりが余りにもない。(中略)

大震災の衝撃が突如つき上がった日、あらぬ心配も同時に私の脳髄をつき抜けていた。関東大震災の、あの悪夢がよぎったからだ。それが思いすごしであったことはその日のうちに明かされはしたが、これが単に私個人のとりにし苦勞でなかったこともまた、事実なのだ。韓国の有力紙、東亜日報の特派員は、惨状の現場から「懸念は杞憂であった」と報じている。期せずして同じ思いには駆られていたのだ。

かくも節くれただった心情がなにによってほぐれたのかを思う。居ながらにして変わったことではないことだけはたしかだ。営々と人権意識を拡げてきた人たちの、名もない多くの誠意がそこにはある。

長田区は人も知る、全国シェア七五パーセントのケミカルシューズ生産地である。戦前はマツチ工場の町だったところだが、戦後のゴム靴ブームで製靴の町となり、手狭な戦前の町並みそのままにこんにちに及んでいた。神戸のゴム業が不振に陥った一九五〇年ごろ、同胞業者が安価で入手しやすい材料でもって作り出したのが、手軽でファッション性のあるケミカルシューズだった。この仕事には国籍を問われるような民族差別は縁がなかった。

この地場産業が再起不能とも思われるほど壊滅状態に陥っている。製靴関連五百余社のうち約半数が同胞企業であり、この地区の同胞のほとんどはこの関連で生活してきた。再起を図るなんらかの目処めどがあるとすれば、国籍を超えていたわり合えた、このたびの苦難は大いにその担保となりえよう。

日本のマスメディア挙げての報道にもかかわらず、在日同胞の被害の実態や、被害者への同胞間の支援活動はそうも現れてはこない。必ずしも報道関係のせいばかりではなくて、その多くは在日同胞の日常の在りようと兼ね合ってもいる。なにしろ方便のはずの「通名」が遺体や行方不明者の確認を手間どらせてもきたのだ。大震災でさらけだされた、私たちが在日同胞の陰の顔でもある。

金時鐘は、次の事柄の確認を希願してこの文章を閉じている。

ともあれこのたびの惨禍では、蘇ったものも小さくはない。なくしかけた人情を思い返したことであり、他人でさえいとおしく思えた自分を、自分で見いだしたことの熱さである。

倒壊した長田区界限の木造家屋を兇悪極まる地震後の炎が焼き尽くす様を筆者もテレビの画像で見て息を飲んだ。長田区が在日朝鮮人の密集地域であり、そこにはまた曾て訪ねたこともある被差別部落の存在することを承知していたが故でもある。

文学者がこの阪神・淡路大震災を如何に受け止め、如何に表現したか。その代表的なものを以下に取り上げることによって、震災によって露呈された問題点を（人権）の視点から追究してみたい。

（一）小田実「深い音」

1

被災体験によ　小田実の「深い音」は『新潮』平成十四年二月号に発表されたもので、阪神大震災を真正面から被災思想　ら描いた初めてにして代表的な小説といつてよい。五六〇枚（一挙掲載）に及ぶ長編小説で、目次には題名に添えて、〈大きな地鳴りが聞こえ、一瞬のうちに万物は崩壊した……。独身中年女性、彼女を瓦礫から救い出した老人、父を殺そうと企む中学生、若い女、二度のポート・ピープルを経験したベトナム難民。阪神大震災被災者たちの生の根源を炙り出す長編小説。〉との編集部の惹句が記されている。

ところでこの作品の最大の特徴は、何と言つても作者自身の被災体験とそれによる被災思想がそこに色濃く投影している点にある。

作者・小田実自身が被災者である。作品を取り上げる前に、まずその被災について触れておく。住所は西宮市（但し住居自体は西宮市の西部、芦屋市と境を接する位置にある）で、玄関の前の土地が陥没して「要注意」の黄色の貼紙が玄関の扉に貼られたその住居である集合住宅は、余震にしろ更なる新たな本格地震にしろ、大きなのが起き

ればも早や耐えることができない状態となり、水道は無論出ず、内部も惨憺たる様を呈するに至った。加えて小田実にとっての不幸は、神戸の長田で被災した後やむを得ず出身地である韓国・濟州島に帰国して行った義父（夫人の父・「在日」韓国人——カギカツコは小田の表記に拠る）がその直後に亡くなったことである。この義父の死について、小田実は次のように記している。

もともと彼はガンの末期で自宅近くの病院に入院していたのだが、その日たまたま自宅に帰って来ていたところで被災（家は焼失は免れたが、ほとんど全壊状態で立つことだけは立っている。近所の人に救出されたとき、二階で老夫妻は何ごとが起こったのか判らない状態で呆然として向かい合わせに坐っていたという）、死傷者の続出で対応しきれなくなった病院に再入院を断わられて、やむなく近くの小学校の避難所に同じように被災した娘たちと避難した。点滴と酸素吸入で生命をつないでいた彼の健康に、それら一切を欠いた、水とおにぎりとおパンだけの（それも十七日、十八日ごろはまったく配給されなかった）、毛布にくるまって床にじかに寝るといふ避難所の「棄民」ぐらしがいかにかたえたかは容易に想像できることだ。／彼らを運び出すようにも運び出す交通手段がない。そのうちようやく大阪から西宮北口まで通い出した電車で、あとは二〇キロの距離を歩いて、大阪在住の娘夫妻が必要な物品をあるいはかつぎ、あるいは台車を押してそこまで運んでいたのだが、そのうちついに大阪まで八時間かかって車で運び出すことはできた。しかし、結局、万策つきたかたちで彼の出身地の養子の自宅に二月六日に「避難」して行ったのだが（その六日にも、関西国際空港でタンを喉につまらせてアワヤと思わせる瞬間があった）、十日足らずのあいだにそこで私も「アボジ」と呼ぶ、おそらく私ひとりが長年の「在日」ぐらしのなかで心の許せる日本人だった、「在日」ぐらし六十余年のひと

りの朝鮮人の八十四年の人生は終わった。⁽⁵⁾

義父の死に関する悲劇はこれだけにとどまるものではなかった。三十八度線での「南北」分断がここでもまた大きな障壁として機能するのである。

葬儀はこの二月二十日に済州島でとり行なわれるのだが、彼の七人いる娘と彼女らの夫たちは、葬儀のために韓国へ行ける人と行けない人に政治的にくつきりと分れる。「南北」分断の悲劇がここにもあるのだ。まず行けないのは「北朝鮮」（朝鮮民主主義人民共和国）に「帰国」して住む三女ははじめから論外としても、日本居住の他の六人の娘たちも大韓民国の旅券をもち、元来が韓国人、韓国の「海外公民」である「韓国籍」と、大韓民国の旅券をもたず、元来が韓国人でない（奇妙な言い方だが、これがこの場合もつとも適切な言い方であるにちがいない。ことはそれほどややこしく、また、べつの意味では単純だ）「朝鮮籍」に分れる。／この「韓国籍」「朝鮮籍」はともに日本政府が勝手につくり上げた分類だが、「朝鮮籍」は必ずしも「北朝鮮」に帰属することを意味せず（帰属しようにも、日本政府はもともと「北朝鮮」の存在を法的に認めていないのだから、帰属しようがない）、ただ、韓国に帰属していないことを示すだけだが（この理由にはいくらかもある。ひとつが、まさに「北朝鮮」を「祖国」として選びとっている場合だが、なかには、韓国、「北朝鮮」のどちらを選択しても、「南北」分断を認めることになる。それよりは全朝鮮を祖国としてとらえて、「南北統一」の日を待つという、私の「人生の同行者（小田実は自身の妻のことをそう呼ぶ——吉田）」がその一例だが、そうした人たちもいる）、韓国側からはどうやらすべて「北朝鮮」に帰属している人たちに見えるらしい。したが

って、韓国へ渡航するということはふつうできない——というわけで日本在住の六人の娘のうち済洲島での葬儀に参列できないのも何人かいる。今述べたように私の「人生の同行者」もまさにそのひとりなのだが、私たちは事情を述べて韓国総領事館と交渉することにして、今このくだりを書いている最中に交渉を始めた。⁶

女性主人公の 「深い音」の主人公「わたし」は、薄暗いただの喫茶店を経営している中年の〈おばはん〉で、語りで展開 神戸の地震で家が全壊し、およそ十二時間落下物の瓦礫の堆積の下で生き埋めになっていたところ、たまたま通りかかった見ず知らずの黒川とその孫の二人に救出され、病院（彼女が「野戦病院」と呼ぶところ）に担ぎ込まれた女性である。隣のベッドのおじさんが親しく話しかけてくるが、〈おじさんは、たぶんこのあたりに多いケミカル・シューズの小さな工場でもやっていて毎日銭勘定に明け暮れしていた、そうとしか見えない顔で、自然とか人間とか、夾雑物とか、そんな顔にまったく似つかわしくないことばを使うてしゃべっていた〉。作品世界は〈わたし〉（橋本園子）の語りで進展する。

黒川は泊りに来ていた孫（三郎）と一緒に被災した人物で、神戸市役所の上級吏員である息子がいる。後日、〈わたし〉の見舞いに来て、地震当日の状況について悲憤慷慨する。〈消防自動車もたしかにやって来ていた。一台、二台、三台と交通途絶、渋滞の混乱のなかを突き切って、合計五台来た。しかし、消火栓から水が一滴たりとも出なければ、何んの役にも立たない。「あれほど無用の長物はないね。」黒川は吐き棄てるように言うていました〉。

「口惜しい気がしたで、ほんまに」と黒川はつぶけていました。「二十世紀ももう終りごろになって、この国際的都市や世界に冠たる港の都市や日本でいちばんハイカラで裕福な都市という街で、消防自動車が何台も来て

も、消火栓から水が出ん……で帰って行きよる。これはいったい何んや、とわしは自分のブンカが焼けるのを孫といっしょに最後まで見とどけるあいだ、園子さん、何んべんも思いましたで、ほんま、園子さん、何んべんも思うた。」

(中略)

「消防自動車が来ても、消火栓から水が出んから放水でけへん。消火栓から水が出なかつたんは、途中で水道管が地震の振動でたくさん壊れてあちこちで水が洩れてしもうたからやと、あの消防の隊長さんは大真面目で言うとったけど、そんなことは子供でも言えることや。いっしょにいたわしの孫もあとでそう言うていよつたけど、これが、園子さん、日本でいちばんモダン、最先端の近代都市や言うていばつて来た都会の消防の隊長の言うセリフやで。あげくのはてが、消防が逃げたあとのわしら住民のバケツ・リレーや。」／バケツ・リレーの列のなかには、戦争中バケツ・リレーをやった人が二人いたそうです。

(中略)

戦争中のバケツ・リレーのことがよう判つたそうですが、お二人とも空襲の火の海のなかでバケツ・リレーをやっていたのではなかつた。戦争がまだ激しくなっていなかつたころの町内会の消火訓練のなかでやったことでした。

(中略)

「バケツ・リレーで空襲の火消せたら、うちらは戦争で勝つてましたで。」おばあさんがうまいことを言うと、おじいさんは「わたしら逃げるのが精いっぱいやったで。わたしらは焼け跡に空襲の明くる日消防自動車がまゐる焼けになってひっくり返っているのを見ましたで。消防自動車いうたら、火を消してまわる車でっしゃる。」

そいつが道にまる焼けになってひっくり返っていきよる。この人やないけど、わたしはそのとき戦争はもう敗けやと思いましたわ」とあとをつづけて、黒川の反対どなりの彼よりたしかに二、三歳は年上に見える上品なおばあさんを指していました。

『被災の思想』

小田実はその日激しい震動の中で（少年のころの空襲の記憶がよみがえって来ていた）と

『難死の思想』

『被災の思想 難死の思想』に書いている。これも実体験に基づくものである。消防車が折角

やって来ても消火栓の水道水が全く出ず、無為のまま去って行った事実に対する痛憤の思いを繰り返して述べており、田中康夫もまたこの事を屢指摘している。⁽⁷⁾（実際、何日、何十日にもわたって水の出ない恐怖は体験した人でないと判らないことだと思ふ。飲料水はかなりの距離を歩いて運んで来た井戸水、救援の友人たちの「ボランティア」がもって来てくれたミネラル・ウォーターか何かで、水の出ない期間のおしまいのころはそれこそ三重県久居市の給水車も来てくれるようになってなんとかなったし、便所の水は、私の住居の場合、森鷗外書くところの『山椒太夫』の場面よろしく海水をくみ上げて来て対応できたが、火事だけはお手上げであった。（中略）／こうした水のな生活生活を長期間にわたってやって来た私のような被災者にとって、まず気にかかるのは消防車がすれちがって通れるという道幅の問題ではなく、消防車が来てはたして防火用の水道栓から水が出るかの問題なのだ。神戸、芦屋、西宮その他の被災地の都市は、防火用の水の準備について、地下に水槽をつくって貯めるとか、水道管を新式の堅固なものにかえるとか、こうした市民の安全にとって基本的なことを、防災体制がなっていないとジャーナリズムに攻撃される東京都に比べてもろくすっぽやっついていなかった都市だという事実をここで指摘しておこう。水道管には戦前からの古いコンクリート製のものも数多くあって、給水のシステムは簡単に破壊された。そうした「ライフ・

ライン」にじかにかかわる都市の「下部構造」の整備を欠いたところで、むやみと道路をひろげ、高層建築を建てても、(高層建築が「防災」にほんとうに役立つかというさつきからの議論は抜きにしても)「防災」にほんの役にも立たないことはここでもう明瞭になって来ていることだろう。「初めに道路ありき」のコンタンはここでもはつきりしている。」⁽⁸⁾というのが実体験に基づく小田実の指摘である。

作品世界の〈わたし〉(園子)は、同室であった芳美(フリーター)から、(病院を追い出されたあと、もし行くところが他におありでないなら、しばらく自分のワンルーム・マンションで自分といっしょに暮らしはってもちのほうはかまへんです、とそのときのわたしにとって何よりありがたい申し出)を受け、部屋代半分負担しての同居の仕儀となる。(はじめに何んか政府が特別のお金を出してくれるというような話をして安心やと言う人もいましたが、フタを開けてみたら、被災者が手にしたのは、これまでにないほど集まった義援金の分配金だけでした)。

芳美がボーイ・フレンドをワンルーム・マンションにつれて来てお茶を飲んでる時に園子が帰って来、そのボーイ・フレンドを紹介された。「この人、ベトナムの人、ベトナム人。……園子さん、ボート・ピープルいうたら、聞いたことありはるでしょう。ベトナムからボートで、船で逃げて来はった難民、この人、ベトナム難民の人」と芳美の言うその青年グエンの兄は南ベトナム政府軍の兵士だったという。グエンは模範難民で、好条件で長田のケミカル・シューズの会社に仕事が見つかり、工場の近くに住みついたところに地震が来た。「グエンさんが他の二人といっしょに近くの公園で適当なのを選んで、そこにそこから拾うて来た木の棒やパイプやらで柱立ててビニール・シートで蔽って屋根をつくって住み出したら、あちこちから、家壊れたベトナム人が、やって来はった。そこでできたのがベトナム村。ベトナム人も日本人も、今、みんなそう呼んでいはる。」／芳美はまた自分のことのように熱心にひとしきりしゃべりました。「(略)ぼくらのとこ、ベトナム・テント村です。」「日本人はいはらへん

のですか」とわたしはつづけてきいた。「いはります。ぼくらが公園に住み出したら、日本人も来はるようになって、今は自分らで掘って立て小屋建てたり、テント張ったりして、日本村作って住んでいはる。この市は国際都市ですから、公園のベトナム人も日本人も同じことをして国際テント村や。」グエンはさっきからのくったくのない言い方を つづけた。

作中のこの〈国際テント村〉を指してこれこそが「共生」なりと安直に呼ぶことは許されまいが、被災者同士のごくに国境の隔たりが除かれ、実生活レベルでの連帯が形成されたことは、プラスのベクトルを意味するものであることには相違ない。後で触れるが、朝鮮人学校に対する周辺地域市民のそれ以前には存在していた隔意（差別意識と呼ぶべきものであるところの）が被災を契機に除去されて行ったことの意味も大きい。〈わたしも思わず「グエンさんもあの地の底からの深い音を聞きはりましたか」とグエンにむきなおって訊ねていました。「ええ、聞きました。ぼくはベトナム人やけど、日本人と同じように聞きました」と、グエンは聞きよによつては滑稽になることばをあの深い音をもう一度聞いているように真剣な顔で口に出した〉とのやり取りもある。

2

「復興都市再開

喫茶店を再開するに当たって〈わたし〉は「アルバイト募集」のビラを書き、山村という少

発計画」とは

年を採用する。少年は大通りの商店街の大きな化粧品店の息子だが、両親の店も近くの住居も

全壊、全焼して、家族は全員無事であったものの、再建、再開の見込みは立たないと言う。〈ことにそのあたり、「復興都市再開発計画」とやらの区画整理で、もと通りに店も住居も建てることはできなくなっていて、いよいよさきゆきはない。少年はそう憤りを込めてわたしにしゃべっていたのですが、わたしはまるで他人事として聞いていま

した。

「復興計画」についての小田実の数多い発言の中の一つを『被災の思想 難死の思想』から引いておこう。

なにしろ、この兵庫県は、地震直後の一月十九日、まだ多くの市民が生き埋めになっているさなかに、これからは「人命救助」より「復興」だ、と知事が公言した県だ、ことは極端にあらわれもするが、中央政治も負けてはいない。災害対策では意志疎通もままならぬかたちで、「人にやさしい政治」どころか、「人にむごい政治」の証拠を残酷にさらけ出した村山富市首相ひきいる政府（この「人にむごい政治」の社会党出身の首相は、大地震の通報を受けたあとも、財界人との「朝食会」に予定をかえずに出席したというのだから、知事と好一對のアタマの持ち主なのだろう）も、首相の諮問機関として「学識経験者」を集めて「阪神・淡路復興本部」を手早くかたちづくった（「復興」以外のもうひとつの政府の関心事は「危機管理」だろう。「危機管理」体制の抜本の見直しを進める民間人主導の「防災臨調」（仮称）も近く設置する予定だと新聞が書いていたが、これも手早くやってのけるにちがいない）。／＼こうした地元政治、中央政治にまたがった動きの基調は、これまでの開発Ⅱ乱開発経済、発展の基本はまちがっていない、さらにそれを強力に推し進めて「復興」をはかるというものだろう。（中略）西宮、神戸と言わず、今、被災した地域で得たりと始まっているのが、被災を利用しての再開発、再開発に基づいての都市計画、明日の街づくりのもくろみだ。なにしろ家屋は消滅しているのだ、縦横に線引をして、道路を自由につくり、超高層の建物をおっ立てる——無視されるのは地元の市民で、今、あちこちで住民との紛争が起こって来ている。（中略）／＼もともと神戸市は七〇年代には近郊の「ニュータウン」計画、八〇年代には人工島の「海上都市」建設というようなさまざまな名目の下に乱開発を行な

つて来て、九〇年代には「インナーシティ」計画の名の下に、長田区、兵庫区などの零細企業の密集した、昔ながらの屋並みの街を一举に大規模に区画整理をして、それこそ「二十一世紀のハイカラな街に」しようとしていた矢先だった。その意味では、大地震によるこのあたりの徹底した破壊、焼失は、こうしたもくろみをもつ市にとっては千載一遇の好機だったにちがいない。うるさい反対運動などやる連中の生活基盤が、これで一掃されてしまったのだ。「人命救助」や被災者の救済にはあれほど熱心でなく、また無能だった神戸市は、大地震後わずか一週間後にいち早く「学識経験者」と「土木建築関係者」のチームをつくって、十数個所の重点地区を内定。復興に伴って行なう区画整理や再開発の青写真を作り、「二月の初めには、私権を制限し、自由に建築物を建てることのできない区画を指定」したというのだから、おどろくほかはない。このあたりの記述は私は「噂の真相」(95年4月)に載った「阪神大震災で北叟^{ほくそ}笑む^{ほくそ}死の商人の卑劣な蠢き」(ルビ・ママ——吉田)に基づいて書いているのだが、今そこから孫引きした「大手紙・社会部記者」の談話のおしまいは「信じられないくらいの素早さですよ」だ。まったくそうである。すべては何人かの人間がまだ倒壊した土中にあつた、また何十万人かが「避難所」の床の上で毛布もろくにないまま寝ているなかでのことだから。その「噂の真相」の一文は、さらに次のような「地元関係者」の言を紹介している。「担当の市の企画調査局なんかは、地震で開発を進めることができ喜んでるんじゃないかという気さえします。実際、長田区の再開発に反対していた住民の間では、『市が再開発をするためにわざと水を止めて一帯を焼き払ったんじゃないか』という憶測まで飛び出すほどですからね」／この計画が実現すれば、行政は巨大な利権を得ることができる——と「噂の真相」は指摘する。「新長田駅前再開発」「中央卸売市場再開発」「兵庫貨物駅跡地整備」、さらに今度はつけ加えて「防災住宅」という名での高層住宅、道路の建設である。これで建設業——土建屋が二重三重に

儲けを手にすることができず、まず、かつて乱開発で大儲けをした、地震でつぶれた、半つぶれになった。じやあ、叩きこわして、それでまたひと儲けして、ついでのことに手抜き工事などあらゆる自分に不利になる証拠を瓦礫とともに消滅させた。そして、今度は再開発——復興で大儲けする。このすべての金儲けに政治家、役人が結託する。この「政・官・財」の癒着構造は地震のあとにも継続して存在しているどころか、さらに強固なものになるうとしている。この構造によって、完全に無視されるのが、棄てられるのが市民である。まさに、「棄民」だ。⁽⁹⁾

被災者にとつての 「アルバイト募集」のビラを見て応じてきた少年のうそいつわりがないものと見えた話
「がんばれ」の言 が終わった後、〈わたし〉が少年に対して言う。

「じゃあ、明日から来なさい。わたしもがんばるから、あなたもがんばり。」／「がんばれ」とか「がんばる」とかいうことばが被災地ではやっていたところだ。そのうちこのことばを聞いただけでウンザリすると多くの人たちが言い出すようになったのですが、まだそのころははやっていました。わたしもそのことばを使うてその少年に言うていた。

被災しなかった者の被災者に対して発する「がんばって下さい」という善意からの激励の言葉が、言われる被災者の側にとつてみれば逆に精神を閉塞状態に追い遣る機能をしか果たさない、それ以外の何ものでもないことがよく言われた。発話者からすればそれ以外に適当な言葉が見つからないのは真実であろうが、聞かされる側の被災者

の立場からすれば精神の解放されることを必死に希求しているのに逆に負担を押しつけられるのであるから堪ったものではない。自らを安全圏に置いたままの善意の表現が負荷を有する者にとって如何なる意味を持つか、考えさせられる課題である。

前出のベトナム村、ベトナム・テント村の住民の食事の様を作者は次のように描出する。

台の上のベトナムの、それらしいダンゴ汁の大鍋を中心に車座になるかたちで椅子を持って来て坐ったりそこらの適当な木箱に腰をおろしたりして思い思いに座をとって、元気よく、また、にぎやかに、そのダンゴ汁、あるいはダンゴ汁らしいものを食べ始めました。子供が半数以上、大人は女のほうが少し多い。ベトナム人はいつもこんなふうにな所の人がみんな集まってしゃべりながら食べるのか、それにベトナム語というのは何かニワトリがかしましく騒いでいるようなひびきがあるのですが、そうわたしはさつきから考えて来たのですが、それもあつてかにぎやかなこと、やかましいことは格段のものでした。

「行政」に対する被災者の不満は憤りのレベルのものであったが、それすらも徒労感を覚えるものとなってくる。

もう少し以前、まだ被災地で人が会えば必ずおたがいの体験をしゃべり合っていたころでしたら、もう少し元気よくわたしらも自分の体験もしゃべり、地震のあとよろくに積極的な被災者救済の措置をとって来ないでいる、そのころ誰も彼もが、怒りとともに口にしていた言い方で言えば「行政」のあり方、やり方について憤慨した口調で弁じたてることもあつたかも知れないのですが、もうそのころには、わたしらはそうするにはあ

まりにくたびれ始めて来ていたように思います。いくら言うたところで、「行政」は動かないし、ことは変らない。まして、見知らぬ他人にいくらしゃべってみたところで何んになりますか。今もつとも必要としているお金が出て来るといいますか。

被災者の憤りの果ての徒労感は、「行政」に対してのみではなく、被災者以外の全ての人びとも向けられる。自身の住むワンルーム・マンションは地震で壊れもせず、強い病院にいたが故に生命にも全く別条なかつた芳美が、なぜ地震に遭うたことを他人に隠そうとするのかとの〈わたし〉の詰問を軽く受け流した後で次のように答える。

「そやけど、あの地震のこと、言うてどれだけ相手の人が判ってくれはりますか？ あの地鳴りの音、あれが園子さんが言わはるるように地の底からの深い音やったか、どんなにこわいもんやったか、判ってくれはりますか？」

ベトナム・テ

〈わざわざ東京から（略）ボランティアやりにやって来ている〉中年の女性が語ってくれた

ント村の存在

ベトナム・テント村の問題の一つは、〈わたし〉の予想した通り〈ベトナム村、ベトナム・テ

ント村と、そのもう少しむこうにある日本人テント村との対立〉であった。〈今は二つともに自治会ができ、二つの自治会どうしの話し合いの会合も催されるようになって事態はだいぶ改善されて来ているのですが、いつときは、自分たちの日本人テント村とベトナム・テント村とのあいだに勝手に境界線こしらえて、ベトナム人がここからなかへ入って来るとぶちのめすぞと木刀持ち出して来る老人までが出て来ていた〉と中年女性は言い、こういうもめごとを惹き起こした原因は〈救援物資〉であると指摘した。ここでベトナム・テント村の村長さん役を務めている四

十がらみのベトナム人が表に出て、〈外国人被災者支援の運動から送られて来る救援物資を半分、日本人のテントの方に、さし上げることで決着〉がつく。〈その代わりこれまで、そういうことに「行政」が正規のものとして勝手に決めた小学校その他の避難所にしか来なかった、いや、その理由づけで公園の日本人村にどうやら届いて来ていたらしいが、ベトナム村には来なかった「行政」のいろんな救援物資の半分を、こちらがしているようにベトナム村のほうに提供してもらえないか、いや、そんなコソクなことをするより、いつしよに行動を起こして「行政」を動かして日本人村、ベトナム村双方、どちらもが受け取れることにしよう。それが民主主義の正道だ。民主主義国家日本はその正道を歩むべし、歩ませろ、とこちら側が提案して、これはその通りやつて実現、「行政」の救援物資は今日本人村、ベトナム村に分けへだてなく来ている〉——とベトナム村の村長は雄弁な日本語で一氣にまくし立てた。

〈わたし〉は〈瓦礫の墓を探しにあちこち歩いて拝む〉ようになる。その気持は、〈非業の最後を悼む〉ということであり、彼女はその気持を更に次のように説明する。

最後は最後です。最期ではありません。「最期」は何か大きすぎます。(中略)「最後」は同じ字引ではこうなっています。「おしまい。「運の尽きた」ということを表わす」瓦礫の墓には、こちら、「最後」のほうがピツタリします。瓦礫の墓の主はすべて自分の運が次の瞬間に尽きるとはまったく考えていなかった人たちです。それが次の瞬間、おしまいになった。だから「最期」ではなく、「最後」です。ただの「最後」です。

(中略)

(あちこちに適当な大きさの瓦礫のかけらを積み上げてあるのが——吉田) わたしの言う瓦礫の墓でしたが、

なにしろ六千数百人が突然それぞれのおしまい、「最後」にぶち当たって運が尽きた都市です。

瓦礫の墓は焼け跡のなかにもいくらでもあった。いくらでも行きあたった。

震災直後、すでに二、三日経ったときでも、火の海のひろがりがあつて焼け跡へ行くと、「そこは踏まんで下さい。下にホトケさんがいる。三人いはる」と言われたりしたものです。

(中略)

(へわたし)には自身もう少しでそのホトケさんになつてはったんやでの気持がある故に——吉田) 非業の最後を悼む、です。字引きによると、「非業」は「前世に犯した罪の報いによらないこと」で、そのあと、「——の死を遂げる〔「思いがけない災難で死ぬ」〕とありました。この意味がこれで正しいとすると、この死はまぎれもなく現世の死です。

3

乱開発という自

主人公は、被災に拠る死はこの世(この世界)の死であつてあの世(あの世界)とは関係

治体の犯罪行為

のない死であると確信している。(現世のことはすべてこの世、現世でやれ、解決が必要なら、

この世、現世で解決する、するより他にないというわたしが震災以来考えて来たこととピッタリする死です)。しかし、(へわたし)はそのうちに気づき始める。ブルドーザーが動き、瓦礫を除去し強引に平らに整地して行くにつれて瓦礫の墓が消える。(へさら)地から瓦礫の墓が消えることは、その下にいっぱい詰まっていた人びとの思い、気持、記憶が消され、消えることです。だから、さら地はさら地です。字引きを見ると、こう書いてありました。「さら地」「新地」すぐ家が建てられるあき地。「更地とも書く」。

「わたし」を瓦礫の中から救い出してくれた黒川も今仮設住居に住んでいるが、再会した黒川の言に拠ると、市は街なかにも多くの土地を所有しているが、そのような土地は将来幾らでも使えるし、高価で販売もできる。手間だけかかって一文の得にもならぬ被災者をそのような貴重な場所に住まわせてはならないということである。

この市が海上にやたらにつくって来た埋め立ての人工島の片隅にはどうにも売れそうにない土地とか、市の背後の山のなか、山のむこうには、彼が今住む仮設の土地のような何んの役にも立たないのに持って来ている不安な土地がある。それが、つまり、仮設を建てるための土地でしたんや。おあつらえむきにそんな売れ残りの土地がある。使いようのないいらん土地がある。あそこに仮設を建てればよろしい——と言いましたんやな、つまり。

ここから小説の世界は一気に乱開発という名の自治体の犯罪的行為への糾弾に進む。

作者・小田実は前出『被災の思想 難死の思想』や『ひとりでもやる、ひとりでもやめる 「良心的軍事拒否国 家」 日本・市民の選択』(二〇〇〇年三月五日・筑摩書房)所収の論において、自治体によるお手盛りの「まちづく」復興計画のその殆どが地震以前から企画されていた計画であったことを繰り返して指摘し、その点こそが重要であると主張している。このお手盛り計画は可能な限り早急に「正式」の計画として認定される必要があったに相違ないことを推定し、その地震以前からの計画が「正式に認定されれば、それは、地震までに神戸市その他の市が長年にわたって行なって来たところの山を削り、海を人工島で埋め、山に幾つもトンネルを掘り、高層建築を立て、高速道路を地盤の如何に関係なく張りめぐらすという乱開発とそれに基づいた「都市づくり」が地震後も遂行され

るべきものとして認定されるに留まらず、過去においても全く誤りのなかったものとして正当化されることになる旨を指摘し続けている。〈そうした「都市づくり」を支えて来たのは、「乱開発」にかかわったの「政・官・財」の癒着に基づいて、徹底して市民の福祉、安全を無視した、そうした市民の福祉とか安全とか金にならないこと、金のかかることには徹底して背を向けて、ただ、金になる事業を追求した「神戸株式会社」の政治だったから、過去の「都市づくり」が正当化されることは、そのまま、その政治のありようすべてが正当化され、容認されることになる。そして、ここでさらに、そうした政治のやり手である県、市の行政側にとって便利なのは、過去がそのかたちで正当化され、容認されてしまえば、その延長線上に立つての現在、そして、これからの未来の政治のありようはまさに過去のままのものであってよろしい——そう自然になってしまうことだ。〉¹⁰と主張するのである。この指摘・主張は当然「海上空港建設」追及へと発展する。〈この名うての市民の福祉、安全無視、金のかかることは一切やりたくない「神戸株式会社」は、地域防災計画の実現に取り組むにあたって、同じ近畿地方にあっても、京都府、和歌山県が「震度7」、大阪府は「6」の地震を想定していたのに対して、すでに乱開発の「都市づくり」が進行して何年も経った一九八六年になってやっと防災計画を制定したのだが、「震度6」ほどの直下型地震の可能性を指摘されながらも、これでは懸案の海上空港建設に支障があるという理由で「震度5」の想定に防災基準を定めていた過去をもつのだ（「震度5」でよしと市におスミつきをあたえた「学匪」の専門家の大学の先生がいた）。いや、この乱開発の「都市づくり」を創始したかつての宮崎「名市長」（とは神戸ではいまだに人がよく言うことだ）は、地震とか防災とかいったものは、自分の考える都市経営の概念のなかには入っていないなかったとか、金をかければいくらでも安全な都市ができる、しかし、「行政経済」というものがある。そこから判断して適当に金をかけないといけない、それでも災害が起これば、それは「受忍」の範囲内のことだと、今も公言してはばからない人物なのだか

ら、こうした行政がいかに「防災」をおろそかにして来たかは言うまでもない」と神戸市当局の自治体責任の犯罪性を告発する。「海上空港建設」に支障があるからという理由で防災基準を「震度5」に定めていたとあっては、市当局の「都市づくり」の計画そのものが犯罪以外の何ものでもない。既に文字通り住民無視の都市計画であったのである。小説「深い音」では、市民の憤りの声として、それが殆ど生のままの形で表現されている。

……長年、「山、海へ行く」の名で知られた方式で、市の背後の山脈を潰し、土を海上の人工島の造成に使い、人工島にはコンテナ埠頭とともに高層、超高層のビルディングを中心に美レいな建物群を人工土地を売って建てさせ、あるいは自らが建て、潰した山脈の土地はそのまま宅地造成をして「ニュータウン」をつくって儲ける。これでは市と言うよりは「株式会社」や「土建屋」と結託した都市やいうことで「株式会社市」「土建屋都市」と言われて来た市が震災前から「株式会社市」「土建屋都市」がきわめつけの最大の事業とし実現をはかって来たのが、人工島のひとときわ巨大なのを造成しての海上空港建設でしたが（後略）

と、市の中堅職員で市長の方策に忠実な息子を持つ黒川が（わたし）に向かつて手際よくこれまでの経緯を説明してくれ、「そやけど、この空港をつくるという話、今もやるというてはりますのやろ」との（わたし）の問いに大きくうなずき、「ほんまにひどい話やで。性こりなくまたやろうとしているのやから。また、ウソついたりデータを Netz 造してやりよるに決まっとる」と応え、更に、（地震は天災、市役所が起こしたわけやない。そうあの消防車のまだまだ若い、やり手らしい隊長は威丈高にわしに言うて来よった」と教えてくれた。その上で、（日本の他の大都市の防災の基準は、震度六の地震に対するものやったのに、この市は基準は震度五——なぜ、そうなって来たのか、

「園子さん、あんた、知ってはるか。」黒川は同じことばをくり返したのである。この問題についての憤りに満ちた黒川の熱弁の景を以下に紹介しておく。

すべてはさつき言った、この市——「株式会社市」「土建屋都市」の究極、最大の問題の海上空港建設にかかわっていると、黒川はそれまで憑かれたように一気にしゃべっていた、その言い方をやめて、一語一語、ことばを選びとるようにしてゆっくりしゃべり始めていました。

……二十一年前のことになるらしいが、市が一つの大学に空港建設予定地の地質調査を依頼したことがある。調査の結果は、市にとって、おそるべきものになった。予定地直下の海底下の土地に活断層が存在する、それが近い将来に動く可能性がある。動けば、震度七以上もの大地震が起きる——その結果が出て、市は大騒ぎになった。これでは当然空港はできないことになる。それで市はどうしたか。この調査の結果はないものとして隠し、市にとって好条件の結果を出してくれる地元の大学の御用学者——その言い方がもつとも適切な、またそうとしか他に言いようのない学者と秘密のうちに勝手に「談合」して「地震の可能性はあっても十万年単位の話、心配はいりません」と地元大学の工学部長のその御用学者に新聞に発言させるとともに、地震の可能性はまずないか、あっても「震度五強」程度のものだとした。……

「園子さん、あんた、判ってはるか、この『五強』という数字がなんで大切な数字か」とまた同じ言い方を黒川はして、さつきまでの憑かれたような早口に戻ってつづけました。

……それやったら、空港はできる。つくってよいという数字なんや。それが「六」やったらできん。「七」やったら、もっとできん。しかし、強がつこうがどうしようが、「五」台ならできる。それが、「五強」の数字の

カラクリや。しかし、それでどうなったか。防災対策は「六」ではなく「五」に対するものでよくなったんや。この方が、もちろん、市にとって安上りやから、いいことになる。なりますがな。つまり、それで、震度七の地震の揺れによって、震度五の地震に対すればよいとされた、戦前のコンクリート製のものをふくんだ古びた水道管は壊れ、猛火の海をまえにして消火栓から水は出ず、火の海はひろがり、必死の住民の井戸からのバケツ・リレーはついに功を奏せず、黒川をふくめて住民は一切がっさいを失った。そればかりではなかった。「わしの戦友は、水が出たら、きつと助かっていたと思うね。」黒川は言うたあと、「わしの戦友はただ死んだんやないで、殺されたんや」とブツブツ口のなかでひとり言をつぶやくようにつぶけた。いや、もうひと言、言うてました。「誰が殺しよったんや。」

そのあと、黒川はそれまでの大おしゃべりがウソみたいに黙り込んでしもうた。

「復興都市再開

（わたし）は折角再開できた喫茶店を「復興都市再開の区画整理」に引っかけて閉店発の区画整理」しなればならないという苦境に立たされている。

「園子さん。あんた、知ってはるか」と今度は黒川が言い出した。地震のあった翌日、市の都市開発局の役人二百人ほどがバイクや自転車で被災地各地に調査に出かけて行ったというのですが、それはほんとうに生き埋めになった人が瓦礫の下でまだ生きていたところです。二百人ほどの役人は、園子さん、知ってはるか、何もう人命救助に派遣されたんやないんやで。被災地のどこがいちばんたやすく安上がりで復興都市再開計画が実施できるか、つまり、どこがいちばんきれいに潰れているかを調べに行きよったんや。」黒川は静かにしゃべ

っていましたが、憤りは十分にその静かな声にも口調にもこもっていました。

その「復興都市再開発計画」なるものは、多くが元来昔から作られていたもので、それが、作られたもののそのまま開発局の金庫の奥深くに蔵い込まれていたもので、黒川に言わせるとその理由は「高うつくからや。高うついて、でけへんかったからや。」ということであり、「今やったら、安うつくからや、安うできるからや。」ということである。「こういう災害で街が潰れてしもうているときには、官憲は法律使うて復興の名の下にどのようにも街をつくりかえることができるのやね。区画整理をやつて、住民が自分で家を再建できんようにして、好きなように線引きしてことを決める。……これが今までわが市の官憲がこれまでにやつて来よつたことや。あんたの店もその官憲の決めよつた計画のなかに入っている。それで潰される。」と黒川は説明してくれる。

小田実⁽¹²⁾は『復興』とは何か⁽¹²⁾で、へたとえば、家が地震でこわれる、それをもと通りのかたちにする。これが「復興」である。と定義した上で、へもちろん、こわれたついでに、新しい家に建て替える場合もあるだろう。あるいは、少し改造して、違つたかたちの家にする。しかし、どの場合にあつても、その家に長年住んできた人が望んだ上でのことだ。望んでもいないのに、いや、早くも通りの家に住みたいと考えているのに、誰かが突然現れて、——おまえの住んでいた家はよくない家だ、かつこうが悪いし、中の間取りもよくない、もつといいものにしてやる。さあ、これがおまえの新しい家の設計図だ。この通りにするから、勝手に家をもと通りにするな。おまえは建築のことなんかわからぬ素人だ。専門家のおれがいいと決めたことをするのだ。素人は黙っている。おれの言う通りにせよ、いや、おれはする、してあげる——と力づくで計画を押しつけ、実際その通りにする。これは「復興」か。私にはただの住民無視、人権不在の強権の行使だ。と述べ、その前提に立つて次のように告発する。〔阪神・

淡路大震災」の被災地西宮に住む私には、震災以来、被災地で行なわれてきた「復興」はまさにこのたぐいの住民無視、人権不在の強権の行使だと見てとれる。強権の行使を行なってきたのは行政の当局者、そして、それと結びついた、いや、結託し、癒着した専門家たち。この「専門家」には、もちろん、この建築雑誌の読み手の人たちも入る。その可能性は十分にある。／新聞記事を引用しておこう。地震ののち二カ月余りが経つての新聞記事だ。「後で知って驚いたことがある。火災がなお続き、多くの人ががれきの下に埋もれていた地震の翌日、都市計画局の職員二百人が自転車やバイクで市内に散った。救出のためではない。都市計画の基礎資料とするため、地区ごとに建物の倒壊、焼失度合いを調査したのだ。局幹部でさえ『こんなことをしていいのか』と葛藤があったという」。

（「毎日新聞」95・3・30）／ひとつ注釈をつけ加えておく必要があるだろう。「都市計画の基礎資料とするため」とあったが、それはその基礎資料を使って、これから被災した住民といっしょに「都市計画」をつくり上げるためではなかった。「都市計画」の設計図は「再開発計画」としてすでにでき上がっていて、それをいつ実行するかの時機を待っていただけのことだ。つまり、この職員二百人の自転車とバイクで市内に散つての調査は、どこがいちばんつぶれているか、焼野原になっているかを調べ上げて、そこでその設計図をあたかも白紙に線を引くようにもつとも容易に、つまりもつとも安上がりを実現できるかを見つけ出すためのものだった、そうとしか言いようがなかった。（中略）記事が問題にしていたのは、「防災都市」計画の名の下に被災地を貫通させようとした「防災道路」のことだ。（中略）便乗が強権の行使となって被災地の住民の上のしかかった。これが、つまり「復興」だった。

小説「深い音」で市当局の対策を厳しく弾劾し続ける黒川のその息子は既に紹介したように市の中堅幹部職員なのである。へさつき、わしは、あんたを今苦しめておる復興都市再開発計画ができるまでの経緯をえらいことくわしくしゃべりましたやろ。あれ、何んでわしがくわしいこと知っているか、園子さん、判りはるか。それは、わし

の息子、あなたの生命をわしといっしょになって助けた孫の三郎の父親があんたらを今苦しめとる張本人、元凶の市役所の都市開発局の役人しとるからや。都市開発局いうたら、今の市長がずっと局長して、土建屋と結託してさ んざんわるいことをして来よったところやが（中略）、なるほどあいつ（息子——吉田）は真面目に仕事をして来た人間やとわしは思うね。ただ、真面目に仕事をして来たことがそのままあんたらをいじめる結果になったんや」と、肉親故の苦衷を吐露する。黒川は更に次のような厳しい現実を伝えてくれる。

冬に入って、孤独死はまさに激増していました。原因は失職、仕事が見つからない、貯金も底をついた、の生活苦、薄いプレハブの壁一枚で外の冷氣、寒風と接する、冷暖房の器具がない、あつても電気代がかさむので使っていない、石油ストーブは火事がこわいので使えない、電気ゴタツひとつが頼み、電気ゴタツも買えなくて炊事用の電熱ひとつで暖をとる——というような仮設の寒さです。これでただでさえろくなものを食っていない老人や病弱者はいちころにやられる。（中略）奈落の底のような仮設に住むわたしも、最近にこの奈落の底で起きた孤独死の事例を昨日は六十八歳の男性、その二日まえは七十五歳の女性、一週間まえには五十四歳男性、さらにその五日まえには八十一歳男性の自殺というぐあいに報告書をまとめ上げるように言うた。「それにしても、何んでまた、八十一歳になる老人が自殺せんとあきませんねん。」とわたしは報告書をしやべり終わってひと言つけ加えるようにして言うと、「それがこの国、わたしの日本なんや」と黒川がひきとってつづけた。

被災者の「孤

小説「深い音」の中で語られている苛酷な現実とは、現実そのものであった。小田実は被災者

「独死」の現実

の「孤独死」の現実を繰り返し訴えているが、その中の幾つかを以下に掲げておく。〔阪神・

淡路大震災〕から三年、今年九八年、被災地はいよいよ「棄民」の悲惨を示して来ている。今なお二万五千世帯（その四万人余の四割が六十五歳以上の高齢者）が住む仮設住宅では自殺、餓死をふくめて「孤独死」の続出——一月十七日は橋本首相までが来ての「追悼式」が行なわれた三周年の「記念日」だったが、神戸の仮設住宅で七十七歳の女性が百九十二人目の「孤独死」、翌十八日には、昨夏、水道代金が払えず水の供給をとめられて女性が餓死、あるいは、渴死したべつの仮設住宅では四十五歳の女性が百九十三人目。彼女が死んだのは、その仮設住宅でそれまでに「孤独死」、あるいはそれに近いかたちで死んだ二十一人の追悼の法要を行なっていたあいだのことだったというのだから、この話はひどい。いや、むごい⁽¹³⁾。

〔私の住む集合住宅の窓から、地震当時液化化現象をひき起こして一面泥海と化した埋め立ての人工島に長くつづく仮設住宅の列がよく見える。今もってそんなものが残っているのかと言わないでいただきたい。震災三年半余、今もって兵庫県全体でおよそ一万世帯が文字通り雨露をしのぐだけの仮設住宅で暮らしているのだが、そこでの今もつとも深刻な問題は、移転先がないことに加えて（「復興住宅」は建てられても、そう行政側の役人たちに言われなくても、なかなか抽選に当たらないので、行き先がない）、金がない、仕事がない——だ、結果として、生きる希望がもてない。いや、実際生きて行けない。「関連死」という、日本もその一員であるはずの「先進国」にはこうした死の事例がないゆえに「先進国」のことにはない死は、これまた翻訳不可能な「孤独死」をふくめて、その数は今もって、いや、今かえって着実に増えて来ている。「孤独死」のなかには、「自殺」はもちろん「餓死」というそ

れこそ「先進国」にあるまじき死の事例さえがある。いや、なかには、水道代が払えず、あげくのはてに給水をとめられての「渴死」の事例さえが神戸の仮設住宅で昨年夏にあった。そして、悲劇は、せつかく「復興住宅」入居への抽選に当たって入居した被災者のなかにさえ、今年四月から六月にかけてのわずか二月のあいだに、三十七歳から六十八歳に至る男性六人、女性一人が「孤独死」をとげていることだ。七人のうち、自殺が四人、自殺が多いのにはおどろくが、「孤独死」の大半が男性であったことは、仕事がない、ことに男性にない被災地の現実を端的に示している⁽¹⁴⁾。

小説世界の黒川は曾て兵士であった人物である。その自らの軍隊体験から、日本の国は兵士たちが国に歯向かうことのないように、日本はうまいで。うまいことやりよるで。まず、ぶちのめして、叩きのめして、傷を負わせて、絶対に歯むかわんようにして、ムホン起こさんようにして、兵隊に仕立てあげよる。そやから兵隊はみんな手負いの兵隊、兵士や」という自説を持っている。その自説に立つて黒川は被災者としての告発を続ける。

「わしは今度の地震で、わしら被災者は国や県や市によってビンタを食わされていると思うわ。地震そのものでわしらは十分に傷めつけられている上に、政治によってビンタをはられて、みんなが手負いの戦友にならされて、この仮設という野戦病院みたいなところに放り込まれていよる。わしはわしのブンカ（文化住宅——吉田）が焼けて焼け出されて、今人里離れた仮設にいる。しかし、だ。あるとき水道管が丈夫で新しいもんやったら、消防車に水が出て十分に火はとめられたもんとちがうかね。あれはここに海上空港つくりたい市が、調査結果をごまかして、震度五の防災態勢をつくり出した結果とちがうかね。（中略）あんたもそうやろ。

やつとこさわしとわしの孫の働きで生き埋めから出されはっても、あとは官憲が勝手につくり上げよった復興都市再開発計画とやらでお店はなくなる、ローンやら何やらで生活再建のメドはたたん。あんただけやない。その官憲横暴の計画で、自分が住んでいたところにもと通りに家を建てて住めんようになった住民は山といふ。みんな国やら県やら市やらによってビンタ食らわされておるんや。(中略)復興というもんは、災害後、自分がいたところにみんなが立ちかえつてもとの通りにすることや。この日本の場合でのように災害に便乗して、自分らの計画を押しつけて来る国は、文明国や先進国やと言うている国にはまず見当らんね。わしは、市のえらい役人がこれは千載一遇の機会やと言うたとたしかな筋から聞いたことあるで。判るやろ、たしかな筋というのは、わしの息子や。(中略)「今言うたんは、みんな、政治がしよったことによつてのビンタや。しかしな、園子さん、しよらんことによつてのビンタもある。そのしよらんことによつてのビンタでも、わしらは十分に手負いの戦友になつとるんや。あんたは今壊れてしもうたお店のローンの返済に苦しんでいはる。これもあんただけの問題やない。全壊、全焼して今はこの地上から姿を消してしもうた家やお店やらのローンをみんなはまだせつせと返済している。返済されている。他の文明国、先進国なら、こういうとき、返済を免じるか、軽くしてくれるもんや。しかし、ここは、この国はやらん。断乎としてやりやらん。」

告発の矛先は

「深い音」の黒川の告発の矛先は日本国政府・国家と自治体とに向けられる。(被災者の生活

国家と自治体

再建のためにまず必要なことは、この生活基盤回復のために必要な資金を中央政府や地方の自

治体の政府が出すことで、これは文明国、先進国はみんなやっている。いや、やっていない国がひとつある」という理由に基づく告発である。アメリカ合衆国との対比においてその告発は展開される。

「そんな災害時に私的財産の補償をするような国は世界にはない。日本と同じような体制の国にはない。つまり、資本主義の国にはないと、誰が言うたか。園子さん、日本の総理大臣が国会で言いよったんやで。ところが、あんた、園子さん。わしらの地震のちょうど一年前に、ロサンジェルス近郊のノース・リッジで大地震が起こった。そのときレッキとした資本主義国、資本主義の本場ちゅうの本場のアメリカ合衆国の政府は即刻、大地震の一週間後には、最高二万二千二百ドル……と言うたら三百万円ぐらいかね、あそこは日本より物が安い国やろから四百万円ぐらいの値うちがあるんとちがうか、それだけのお金をホームレスに至るまで連邦政府、つまり、中央政府やね、それと州政府、これは日本で言うなら県地方自治体の政府やね、この二つが共同して小切手切って渡していよった。日本でわしらの地震の起きたあと、危機管理庁、フイーマという名のアメリカの役所の名前がいつときはやったこと憶えてはるか。こういう役所をつくって、災害時の危機管理をもつときびしくやれ、やらんといかんとテレビで議員やら役人やら評論家やらがさかんにわめきたてていよったけど、そいつらが一言半句も言わなんだんは、そのフイーマとかいうアメリカの役所がしよったのは、まず、このお金を被災者に渡して、被災者を安心させるとともに生活再建の道をひらいてやったことや。そいつらは、一切、このかんじんなことは言いよらんかった。(中略) そやけど、この政府は銀行や他のノンバンクや何やらの金融機関がバブル経済で大儲けしたあと、そんな甘い汁がつづくわけやない、経営が行きづまって来ると、早速、公的援助金を何千億円でも何兆円でも出す。被災者に公的援助なんかいらん。するなと言うて来よった新聞、雑誌もすぐさま銀行、金融機関を救えと言い出す。これがわが日本国や。はっきりしとることは、アメリカは資本主義国であつてもたしかに民主主義国やが、日本国は資本主義国であつても決して民主主義国でないことや。資本主義国と言うよりただの銀行国、金融機関国と言うたほうがよいかも知れん。

黒川のこの告発は無論作者・小田実の主張である。次に引いてみよう。〔「天災」に対して政治は「責任」はない。だから、「公的援助」はしないと政府は言い続けて来た。しかし、政治は「天災」が引き起こす「被災」に対して、それを「人災」に変えさせない「責任」を持つ。その「責任」を果たさせるためにこそ市民は税金を拠出し、国と自治体の政治を形成、維持している。〕「阪神・淡路大震災」の被災者の現在の惨状は、政治がその責任を果たしていない事実を端的に示している。／日本のような政治制度、つまり資本主義国では個人財産の補償はしない——これも政府が言ったことだ。しかし、私たちが求めている「公的援助」は財産の「個人補償」ではなく、生活基盤回復のための最小限の国の支援だ。資本主義「先進国」のアメリカ合衆国は「公的援助」を行っている。大災害によって市民生活は危機に陥る、民主主義国家の基盤は市民にある、市民の危機は国家そのものの危機だ——というのが、アメリカ合衆国の「公的援助」の根拠だが、被災者への「公的援助」をこれまで行わなかった日本はバブル経済の大金儲けの失敗の結果の金融破綻を国家の危機として、三十兆円もの「公的支援」を、責任、汚職、犯罪を不問にしてまで行おうとする¹⁵⁾。〔被災の現場で、また、そこで助け合いながらなんとか生きていく中で、私たちがその体験を通して共通して認識したことは、災害によって住まいを失い、家財道具を喪失して生活基盤を破壊された被災者には、生活基盤回復のために公的援助金の支給が基本的になされない限り、生活の再建はない、また、被災者の生活の再建がない限り、地域の復興はあり得ない——ということでした。〕／同様の認識に立って「阪神・淡路大震災」の奇しくも一年前、ノース・リッジでの大地震の被災者に対して、アメリカ合衆国政府は最高二万二二〇〇ドルの公的援助金の給付を連邦政府と州政府の責任において行ないました。日本においても、阪神・淡路大震災に先立つ大自然災害、奥尻島の大地震災害、島原における噴火災害、この二つの大災害において被災者は、一時金およそ四〇〇万円、それに上乗せする形で約一二〇〇万円を給付されることによって、生活再建と地域の復興

の土台は形成されました。／＼しかし、アメリカ合衆国と日本の場合では、根本的な違いがありました。前者の場合は、政府が責任を持って公的援助金の支給を行なっているのに対して、後者の場合は、この公的援助金の支給はすべて義援金からのものでした。明確な違いは、前者においては政府が責任を持って公的援助金の支給を行なうのに対して、日本の場合は、政府が責任をもって行なうことなく、すべて民間からの義援金に肩代わりさせることで行なうという無責任なものであることでした。阪神・淡路大震災において、この違いは残酷なまで明瞭になりました⁽¹⁶⁾。

「深い音」の〈わたし〉の喫茶店も「復興都市再開発計画」の対象となり、〈お役人たちの言い方で言えばわたしの面倒を見て来た若いお役人〉は、「これでいよいよ橋本さん、防災完備の新しい高層建築のなかで、安心してあなたのお店を新しいビジョンをもって発展させてやって行って下さい。今、そのときが来ました」と親しそうに言うのだが、新しい店舗用として指定された空間は、現店舗レモンの土地を売却した後、その売却代金のみではどうして防災完備の高層建築の中には入れない、〈辛^(マツ)じて入れても二階か三階かの隅っこにわたしの分として予定されているその場所ではまず客は来るはずはないしわたしのお店を新しいビジョンをもって発展させてやって行けるはずはない〉というのが、自治体の与えてくれた「復興都市再開発計画」の実体なのである。高層建築の隅っこ空間に店を持つにしても、そのために費用が要るが、〈わたし〉にローンを組んで金を貸してくれる者などありはしない。まして、〈わたし〉は既に現在の店のためにローンをして、それを今もなけなしの〈レモン〉の収入から月々出して返却している最中なのに、今更新しいローンなど出来る筈がない——という〈わたし〉の側の条件は、それまでの交渉から役人が重々承知していることなのである。

「深い音」の結末部近く、〈わたし〉は知り合いの新聞記者に聞いた「官権横暴」のもう一つの実例について次の

ように話した。

来年一月、あとひと月ほどで震災は一周年をむかえるが、そのとき震災犠牲者の追悼式が皇太子夫妻、現首相、地震が起こったときに首相だった前首相、衆議院議長、震災後すぐこれからは人命救助より復興やと言いつ出した知事、震災後一度たりとも被災者のまえに姿を現さなかった市長、似たような言動をした中央、地方の政治家、役人、商工会議所の会頭、有名企業の社長など七百人が集まる。六千本の白い菊を犠牲者の碑を中心に円状に配し、そのまわりを困難をひとつひとつ乗り越えられるように節目のある竹で囲み、さらには両わきには被災地が支障なく復興するさまをあらわすために大きな会場の高い天井にまで届く青竹を立てて盛大、華麗に行なわれることになっているのですが、さて、その会場に招かれる遺族はただ四十人のみ——これはいつたい何んやとわたしの知己の新聞記者はいきまいていました。

〈告発〉としての 五六〇枚に及ぶ「深い音」の世界は無論虚構の小説世界である。ストーリー自体にはさ程小説「深い音」の物語性があるわけのものではない。語り手である〈わたし〉（橋本園子）を瓦礫の山の中から祖父と共に掘り出し救出してくれた黒川紀一郎の孫・三郎は父親を憎み、殺そうとすら思っていたが、突然の地震で実行に移さずに済む。〈わたし〉と黒川は幾度か同衾するがその都度黒川が不能に陥り、男女関係を結ぶには至らない。退院後〈わたし〉と同居することになった木下芳美（地震で怪我をしたのではなく、盲腸炎手術で病院に入ったあと、傷口が膿んだために予定より長い入院を余儀なくされ、そこで地震に遭遇し、かつぎ込まれて来た〈わたし〉との機縁が生じたわけである）は、ベトナム人被災者のベトナム・テント村村長格グエンと急速に親しい仲

となるが、グエンは不能であり、別れるべきだとの決意の下にボーイ・フレンド遍歴を続けているうちに妊娠する。それでもグエンを忘れられない芳美はグエンの不能を治そうとアメリカ製の薬の服用を奨めるがグエンは肯じない。芳美の語るグエンのその理由は、「アメリカの化学薬品の薬ですやろ、そんな薬は成分のどこかで、アメリカさんがベトナム戦争のあいださんざんベトナムで空から撒きはった枯葉剤……あれとどこかで関係がある。(中略)そういう薬はアメリカの会社のもんや。アメリカの会社のもんやから、枯葉剤の成分や、いや、それ以上に悪い何かの薬の成分が入っているのどちがうか。いや、確実に入っているにちがいない。……そう言いはるんや。不能を回復させる薬をなんとか手をまわして手に入れて使ったら、なるほど、あの人もセックスできはるようになる。うち夫婦めおとこごとしはるようになるかも知れん。しかし、そしたら、悪い成分が当然わたしのからだのなかに入りますやないか。それが体内に溜まってみ、園子さん、どんなお化けがここから生まれて来るか判らへん」ということである。芳美は更に、「あの人の国はアメリカにベトナム戦争でほんまにめちゃくちゃな目にあわされたんや。そやから、グエンはアメリカのもんは何んでも信じはれへんみたい。アメリカのもんは民主主義も自由も爆弾も枯葉剤もそんな薬も、ぼくは何んもいらんと言うてはった。そう言いはるけど、あの人、コーラはけっこう好きみたい」と語り続ける。作品の末尾部で、芳美のお多福顔に生気の蘇っていることに気づいた「わたし」がグエンと芳美の性関係の好転を確認し、「どうですか、グエンとはもう茶飲み友だちやのうなっただんですやろ」、「うちもええことや、おめでたいことやと思えますねん。せいだい子供つくって行こうと思えますねん。グエンもそうしようと言うてはりますねん」という「わたし」と芳美との遣り取りのあと、芳美の「何んや深い音がわたしのお腹からして来ているような気がしますねん」との明るい言葉で、小説世界は終わっている。

小田実の「深い音」は、自身が〈阪神・淡路大震災〉の被災者である作者の、残念ながら十分には文学表現・形

象化し得たとは言い難い（告発）の作品である。人間の生きる権利、生命の全き維持を損ねるものたちが（告発）の対象である。人間の生きる権利を脅かすものとは、そのことによつて不当な利益を受ける位置にいる人間の謂であり、そのように機能する組織・システムのことである。（阪神・淡路大震災）はそのような人間や組織の有する問題点・矛盾を残酷なまでに剥き出しにしてみせた。自身が被災者であるアンガージュマン作家の小田実はその問題点を被災者の視点から、現実との距離を殆ど置かない形で小説のスタイルによつて（告発）せざるを得なかったのである。

〔注〕

- (1) 小田実『被災の思想 難死の思想』（一九九六年四月・講談社刊・I-1「二月十七日午前五時四十六分」）
- (2) 田中康夫『神戸震災日記』（平成八年一月・新潮社刊）所収の各文
- (3) 田中康夫「ゲンチャリにまたがって」（『日刊スポーツ』一九九五年七月三十一日～八月二十一日連載。のち右『神戸震災日記』に所収）
- (4) 金時鐘「苦難と人情と在日同胞」（『朝日新聞』一九九五年二月十五日）
- (5) 小田実『被災の思想 難死の思想』（I-1「二月十七日午前五時四十六分」）
- (6) 同右
- (7) 田中康夫『神戸震災日記』所収の各文
- (8) 小田実『被災の思想 難死の思想』（I-3『防災モデル都市』とは何か）
- (9) 小田実『被災の思想 難死の思想』（I-2『棄民』としての被災者）
- (10) 小田実『被災の思想 難死の思想』（I-3『防災モデル都市』とは何か）
- (11) 同右
- (12) 『復興』とは何か（『近畿版・建築ジャーナル』一九九八年九月号、小田実『ひとりでもやる、ひとりでもやめる』「良心的軍

事拒否国家」日本・市民の選択』二〇〇〇年三月、筑摩書房刊所収)

(13) 『経済大国』が日本を滅ぼす——私の新年の挨拶』(『東京新聞』一九九八年一月二十九日・夕刊、小田実『ひとりでもやる、ひとりでもやめる』所収)

(14) 「わがただの、『経済大国』の姿かたち」(『北海道新聞』一九九八年九月一〇日、小田実『ひとりでもやる、ひとりでもやめる』所収)

(15) 『人間の国』にするために」(『朝日新聞』大阪・一九九八年五月七日、小田実『ひとりでもやる、ひとりでもやめる』所収)

(16) 「私たちの訴え」(「市民」議員立法実現推進本部」発行の運動のピラ・一九九九年二月七日、小田実『ひとりでもやる、ひとりでもやめる』所収)

(なお、本論攷は、平成14年度学部共同研究「日本文学・日本語の変遷と享受の研究」によるものである。)